

楊守敬及びその日本古文書の収蔵

葛 劍 雄

復旦大学中国歴史地理研究所

楊守敬（1839－1915）、字惺吾、別号隣蘇老人、湖北宜都（現在枝城史）の出身で、中国清末民国初年の著名な歴史地理学者、書道家である。

清道光十九年の春、楊守敬は宜都にある商人の家に生まれた。その祖父と父は多くの店を経営していた。楊守敬が四歳の年に父が亡くなり、家業は全部祖父が取り仕切っていた。家庭環境の影響かもしれないが、楊守敬は幼少から商業の才能に恵まれ、五歳の時から店舗でお金を数えることを手伝い、十一歳の時に祖父に指示されて叔父の孫氏の店に見習いに行き、その次の年に家の店で経営に携わったのである。楊守敬は成年後、自ら店舗を開き、人柄が良く、処世に聡かった。

楊守敬は天資英明で、六歳の時から母親が字を教え、読書も始めた。八歳の時から覃姓の先生について読書し、九歳で作文を勉強したという。十歳から謝姓の先生につき、十四歳から朱鳳池先生についた。この年に宜都縣の科挙試験に参加し、十三位の好成績を得た。十八歳に府の試験に参加したが、三回とも落ちたという。十九歳の時に朱槐卿に師事し、手早く文章が書ける能力を身につけ、この年に、縣の試験と府の試験で五回も一位になった。ところが彼は二十歳、二十一歳の時に郷の試験に参加したが、結果は二回とも受からなかった。やっと同治元年（1862）四十四歳の年に郷の試験で八十位になり、挙人となった。その後、楊氏は北京の会試に七回参加しに行ったが、全部果たさずに終わった。最後の第七回の時、彼は既に四十八歳になり、それ以来は科挙を断念し著述に専念した。

楊氏が秀才になったときから「坐館」（家庭教師をする）を始め、前後に故郷、北京、山西高平縣などでお金持ちや、官僚の子弟を教えた。楊氏の実家は米屋を経営しているが、生活する以外には余裕がなかった。彼は三十五歳から自ら商売に従事し、北京で友達の潘存から八百両の白銀を借り、同郷商人の張雲陔に託し、北京からきのこを買い、湖北で販売しようとしたが、お金は張雲陔に流用され、経営は失敗した。三十八歳の年に親戚に借金して紙業の経営を始め、自ら店を開き、主任を務めた。四十歳の時に紙屋を弟の楊先三に与え、自分の著述『楷法遡源』の版を持って武昌に本を売りに行き、多大な利益を得た。

三十七歳の時、何如璋が天津の商人に紹介したおかげで、楊守敬は初めて字を売ることになった。彼の書道作品は半月に満たない間に百五十元も売れた。その後、彼が五十八歳、六十八歳の時に上海に書道作品を売りに行った。七十一歳の時に彼は上海怡和洋行の総弁甘翰臣の家に住んでいたが、彼の書を求めて来る人は非常に多く、昼に続いて夜も来客が大勢い

たという（『隣蘇老人年譜』）。六十八歳と七十一歳の時に二回両江総督端方衙署に赴き、所蔵する金石碑版の鑑定をし、題跋を書いた。

楊守敬は科挙試験に連続して落第したが、七回北京に行く間に大勢の名流学者たちと知り合った。例えば潘存、邴承修、何如璋、李慈銘、龔橙（龔自珍の息子、段玉裁の孫）、袁昶、譚獻廷など。何如璋が清国駐日本公使を務めた時に、楊氏を随行に招き、日本公使館に務めさせた。楊氏は四十二歳の時に東京に赴き、次の年に黎庶昌が駐日公使になった時も楊氏は留任した。日本には四年間ほど滞在し、四十六歳の年に帰国した。この間に、楊氏は日本の漢文古籍を収集し、黎庶昌のために『古逸叢書』二十六種、二百巻を刻印した。その多くは中国に既に伝承が絶えた、或いは流失した古籍である。この叢書は光緒十年（1884）に刊行した。同じ年に、楊氏はまた十六巻にわたる『日本訪書志』を著し、光緒二十七年（1901）に刊行した。楊守敬が日本に滞在する四年間は彼の人生において大きな事件であると同時に、中日文化交流史上においても重要な出来事である。

楊氏は二十歳（清咸豊八年、1858）の時から地理学に興味を示した。当時余杭の鄭蘭は太平天国の戦事を避けるため、宜都楊氏の住居に下宿した。楊氏は鄭蘭が本を晒す時に、『六氏輿地図』を見て、即借りて二部転写し、このことは鄭蘭に賞賛された。楊氏がはじめて北京に行った時に、邴承修と『歴代輿地沿革險要図』を共に描き、三十八歳の時にまた武昌の東湖饒敦秩の家で続けて描き、これを光緒五年（1879）に刊行した。光緒の末年になり、楊氏はこの地図にまた修訂を加え、六十八歳の年に再び『歴代沿革險要図』及び『春秋地図』を修訂した。また、楊氏は弟子の熊会貞の協力で『歴代輿地図』のセットを編成した。光緒三十二年（1906）、楊氏は『歴代輿地沿革險要図』の序に次のように書いている。

四十年前、私が北京にいるとき、邴鴻臚承修と『歴代輿地沿革要図』を著し、光緒戊寅年に、再び東湖饒君敦秩と増編し、これを刊行した。時間が経つと、鄂中、滬上、西蜀各地にこれを翻刻するものが溢れる。これには間違いが多く、再び修訂しようと思いつながら、その時間がなかった。日本の河田熊氏は、この本をもとに添削、合併して、南北朝を一図にまとめ、劉宋、北魏二代のみにふれたが、南朝の宋・齊・梁・陳、北朝の元魏・齊・周についてはふれなかった。疆域州郡は、その分裂と合併は常に変化するのに、それを一つの図に収めた。五代と十国も、めくっているだけで、私の地図が簡略であることを言う。なんと無茶な言い方だろう。その影響でこれを初めて見る人は、その刻印の精美に目を奪われ、事実の有無は考査しない。深く害を後の学問に残す。なので、私は門人の熊会貞に、この地図を再び校正、補足するようお願い、この地図を読んだ方に、ただ表面だけに止まらないよう願う。

『歴代輿地図』はその冊数が多いため、何回かに分かれて完成し、刊行した。その具体的な年代と図を下に記する。

光緒三十年（1904）、前漢の地図；三十二年、春秋の地図、『歴代沿革險要図自序』；三十三年、三国地図；宣統元年（1909）、戦国、秦、續漢、西晋、東晋、劉宋、蕭齊、隋の地図；

二年、明地図、北魏、西魏地図；宣統三年、十六国、梁、陳、北齊、北周、唐、五代、宋、遼、金、元地図。

これらの地図は「古墨今朱」（古代のは墨色、現代のは朱色）の印刷法を使い、同時に古今内容の違いも反映した。春秋戦国から明代まで、凡そ先秦典籍及び正史『地理志』に出ている考察できる地名の殆どを書き入れ、二十世紀七十年代の半ば頃に『中国歴史地図集』が出版されるまでに至って、この地図のセットはずっと中国歴史地図の中に学術的にも高い価値を持つ、最も重要な、全面的な地図であった。これは中国歴史地理学と歴史地図学において一里塚となる存在である。

1954年、毛沢東が歴史学者の呉晗に、中国古代史を読むとき、どうやって古代地名の現在所在地を知ることができるのかという質問をした。呉晗は楊守敬が編制したこの地図を推薦したうえ、この地図の検索などが不便であること、使用地名は今の地名と違って、すべて清末の地名であることを指摘した。この地図の改編を提言した。毛沢東は彼の提言を受け入れ、呉氏に「楊守敬『歴代輿地図』改編委員会」を組織するよう命じ、委員会の主宰に自らの先生譚其驥を北京に招いた。その後、紆余曲折の結果、『中国歴史地図集』の編纂を決め、1989年にはじめて『中国歴史地図集』の全八冊を出版した。

楊氏のその他の地理著作は他にもたくさんある。『隋書地理志考証』九卷、補遺一卷、光緒二十一年刊行；『晦明軒稿』二卷、『續稿』十卷、光緒二十六年刊行；『漢書地理志校補』二卷、光緒二十六年刊行；『水経注図』四卷、『補』一卷、光緒二十一年刊行；『水経注疏要刪』四十卷、光緒三十一年刊行；『水経注疏要刪續補』、宣統元年刊行；『水経注疏要刪再續補』、未刊；『禹貢本義』一卷、光緒三十一年刊行；『三国郡縣表補正』八卷、光緒三十三年刊行；『湖北江漢水利議』、光緒三十四年刊行。楊氏が選んで刻印した『古逸叢書』と自ら書いた『日本訪書志』のなかにも、貴重な古代地理書を大量に記録した。楊氏は『水経注』の研究に力を注ぎ、晩年に弟子の熊会貞の協力で書いた『水経注疏』と『水経注図』は中国の『水経注』研究の集大成とも言える、空前絶後の名作であり、未だにこれを全面的に超えるものはない。

楊守敬が六十一歳の年に、湖廣総督張之洞の要請を受け、両湖書院の教習に務め、地理学の講義を担当した。六十五歳の時に、朝廷が経済特科を開き、張之洞と両江総督端方と共に楊守敬を推薦した。彼の博識多才と、特に地理学に数十年専念し、歴朝の沿革險要に詳しく、著書が多いことを賞賛した。羅振玉はかつて楊氏の地理学と王念孫、段玉裁の小学、李善蘭の算学と共に、清代の三絶学と賞賛した。現代の歴史地理学者も楊守敬の地理学に於ける優れた貢献を肯定している。

楊守敬が日本漢籍及び古文書と関わりがあったのは、彼が日本に到着し、公使随員になったからのことである。彼は『年譜』でこのように言う。

先是、余初到日本。遊於市上、睹書店中書、多所未見、雖不能購、而心識之。幸所携漢魏六朝碑版、亦多日本人未見；又古錢古印、為日本人所羨；以有易無、遂盈筐篋。

この前に、私が初めて日本に着き、街をぶらぶらしたら、本屋においてある本の多くが

見たことのない本であることに気づいた。買えないけれど、内心とても気に入った。幸い自分が持っていった漢、魏、六朝の石碑版本の多くは、これまた日本人が見たことのないもので、また古銭、古印なども、日本人が欲しいものである。お互い持っているもので持っていないものと交換し、遂に荷物がいっぱいになる。

楊守敬が漢文古籍を収集する状況については、他の学者の既に詳しい研究があるので、ここでは楊氏が収集した日本の古文書とその伝存の過程について検討してみたいと思う。これについては未だに直接的な記載がないが、楊氏の『年譜』及び『日本訪書志』から伺うことができる。

楊氏は当時日本に大量な唐人（中国唐時代）の手跡が保存された事実に気づき、其の原因について語った。

日本氣候、固無我江南之多霉爛、亦不如我河北之少蠹蝕、何以唐人之跡存於今者不可勝計？蓋国有力之家皆有土藏、故雖屢經火災而不毀。至於抄本、皆用彼国之茧紙、堅韌勝於布帛、故歷千年而不碎。

日本の気候は、もとより我が国の江南ほど腐りやすくはないが、河北ほど蠹蝕が少ないわけでもない。何で唐人の書籍がこんなに計り知れないほど残っているのか。この国では実力のある家には皆土蔵があり、それ故、屢々火災にあっても焼失することはない。抄本の場合は、全部この国の茧紙を使い、これは布帛より丈夫で、だから千年経っても破れることはない。

高山寺と法隆寺は楊守敬が最も力を入れて収集したところである。「日本は仏法を好むので、戦事があっても、古刹を破壊することはない。故に高山寺、法隆寺二カ所に所蔵する唐の經書、仏教の經典などは、万卷を下らない。經、史類の古書も、多く所蔵している」。高山寺と法隆寺からそれぞれどれぐらの日本古文書を収集したかについて楊氏は言及していないが、現在見ている文書の多くが高山寺から収集したものであることから、楊氏が中国に持って帰った文書の中に、法隆寺から収集したものも当然あることは推測できる。

楊守敬は『日本訪書志』で、これらの散在した文書について記録していないため、その伝存の過程については判断できない。楊氏蔵書の保存と移動の経過をもとに推測するしかない。

楊守敬は帰国後すぐに湖北黄崗の教諭になり、五十歳の時（光緒十四年、1888）に、蔵書の為、黄州で隣蘇園（城北に蘇東坡の赤壁があることから命名）を建てた。これらの古文書もここに収蔵していたはずである。六十四歳（光緒二十六年、1902）の時、彼は両湖書院の教職を担当したとき、武昌菊湾で家を買ひ、次の年に書樓を建てたので、隣蘇園の書籍文物のすべてはここに引っ越ししたと思われる。

宣統三年（辛亥、1911年）、武昌で武装革命が起り、楊守敬は戦乱を避け、上海に移住した。書籍は武昌に残り、使用人が守っていた。この後、日本人寺西秀武が民軍の都督黎元洪に希望を出したことをきっかけに、黎元洪はわざわざ楊氏の家に次の内容の告示を貼った。

照得文明各国、凡於本国之典章図籍、罔不極意保存、以為国家光荣。茲查有楊紳守敬、藏古書数十万卷、凡我同胞、均應竭力保護、如敢有意圖損毀盜窃者、一經查覺、立即拿問治罪。楊紳系篤学老成之氏、同胞咸當愛敬、共尽保護之責、以存古籍而重郷賢……

各文明国を見て、凡そ自国の典章図籍に、極意にして保存に務め、これをもって国家の光荣と為す。今楊紳守敬が、古書を数十万卷所蔵することが分かり、我が同胞は皆力を尽くしてその保護に務めるべき、所蔵書籍に損害を与えたり、窃盗をしようと図るものが居れば、発覚する次第、直ちに罪を問う。楊紳は博学、老成の方で、同胞は皆敬愛をすべく、共に古籍保護の責任を果たし、これをもって古籍を保存し、郷の賢士を大切に……

中華民国元年（1912）、楊守敬は家族に武昌の蔵書を上海の住所に移すよう命じた。民国三年、楊氏は総統袁世凱に参政に命じられ、北京に移住したが、そのときに上海の図書を全部北京に移動した。民国四年（1915）、1月9日、楊守敬は北京で逝去した。

現在楊守敬が収蔵した日本古文書が主に湖北省博物館に集中していることから、楊氏の幾たびの引越しにも、これらの文書の主な部分は上海や北京には移動はしておらず、『歴代輿地図』と『水経注』の木版と一緒に武昌の旧宅に残されたことが推測できる。1963年10月23日、楊守敬の孫先梅とその息子の樹幹がこれを湖北省文史研究館に寄贈した。現在湖北省博物館に保存されている楊先梅、楊樹幹の手紙には次のように書かれている。

今將先祖楊守敬先生遺著是業經刊成的『歴代輿地図』及『水経注図』兩種版片全部、捐獻呈於湖北省文史研究館、恭請保管、理合開具清冊如下：…

この度は先祖楊守敬先生の遺著『歴代輿地図』及び『水経注図』の兩種版片を全部湖北省文史研究館に寄贈する、恭しくご保管を請う。整理して、内容の明細を次に記す：…

この手紙で木版の保存経過について、次のように語っている。

上列図版、原存於武昌闕級營街寓所。一九三七年抗日戦争起。為了保存起見、冒日寇飛機轰炸之危險、用小船分三批運往漢口、租屋保存。因租金奇昂、一遷於漢潤里、再遷於□□里、最後又遷於漢口郊外農民家。時日寇侵犯漢口、見欲毀之、經農民泣求始免。一九四五年抗戰勝利後、始遷於現居之滿春巷。

上記の図版は、もともと武昌闕級營街の寓所に保存した。一九三七年抗日戦争が起り、保存の為、日本軍飛行機の爆撃の危険を冒して、小船で三回にわたり漢口に運搬し、家を借りて保存した。家賃が極めて高かった為、一度漢潤里に引越し、その後□□里に引越し、最後に又漢口郊外の農民の家に引越した。当時日本軍が漢口に入り、これを見て焼き壊そうとしたが、農民が泣いて御願いしたので始めて免れた。一九四五年に抗日戦争に勝利した後、初めて現在の滿春巷寓所に引越すことができた。

この手紙でこれらの古文書について言及しなかったのは、当時重要視されていなかった為かもしれない。しかし、木版はその後ずっと湖北省博物館に保管されていることから、これらの文書も同時に湖北省文史研究官に寄贈され、博物館に引き渡されたと考えられる。現在山東にある個人が収蔵した一部分の文書も、武漢楊氏旧宅から流出したものと判断できる。

上海博物館、天津市藝術博物館、北京図書館、北京大学図書館にそれぞれ散在した文書が所蔵されていることから、楊守敬が生前図書を上海、北京に遷移した時にも一部分の日本古文書を持ち出し、その後他人の手に流入したことが推測できる。例えば天津藝術博物館の文書は主に周叔弢の家にある。こうしてみれば、これらの文書はまた他の地方に流失している可能性もある。但し中国の学者或いは収蔵家はよくこれらの文書を敦煌文書、又は古人の写経と誤認することがある。故に全面的且つ普遍的調査をしない限り、判明しにくい。著録（例えば高山寺或いは日本その他の寺院、年号）を明記する者以外の鑑定は極めて困難である。

最近、友人の靳飛先生の話によると、慶應義塾大学の斯道文庫の中に、森立之の七冊の手稿『清客筆談』があるという。森立之は楊守敬訪書の主な仲介となる人物である。楊守敬は「日本収蔵家余之所交者、森立之、向山黄村、島田重礼三人、嗜好略与余等。其有絶特之本、此録亦多採之（日本の収蔵家で私と交友した者は、森立之、向山黄村、島田重礼の三人がいる。皆私と同じ嗜好で、その所蔵に珍しく、独特なもの多くは、この録にも採用させていただいた）」と言った。『筆談』の中に、森立之が抄録した談話記録以外に、また楊氏が筆談に使う原稿が入っている。ちょうど冬休みだったので、私はその原稿を見ることができなかったので、これらの文書に関する内容があるか否かもわからない。

楊守敬は『日本訪書志縁起』で次のように言う。

日本維新之際、頗欲廢漢学、故家旧蔵、畿於論斤估值。尔時販鬻於我土者、不下数千万卷。猶憶前数年有蔡姓者、載書一船、道出宜昌、友人饒季音得南宋版『呂氏読書記』一部、扨云宋元槧甚多。意必有秘笈孤本錯雜於中、未知流落得所否？今余收拾於殘剩之後、不能不為來遲恨、亦不能不為書恨也。余之初來也、書肆於旧板尚不甚珍重。及余購求不已、其国之好事者遂亦往々出重値而争之。於是旧本日稀、書估得一嘉靖、亦視為秘笈、而余力竭矣。然以余一人好尚之篤、使彼国已棄之肉復登於俎、自今以往、諒不至拉雜而摧燒之矣。則彼之視之為奇貨、固余所厚望也。（近日則聞什襲藏之、不以售外人矣。）

日本維新の際に、強く漢学を廃しようとした。故に家の旧蔵漢籍は、重さで計って売られるぐらいだった。当時我が国に販売してきたものは、数千万巻も下らない。数年前に蔡という名前の人がいて、書籍を一つの船に積んで、宜昌に出たことは猶覚えている。友人の饒季音は南宋版『呂氏読書記』一部を手に入れた。話に扨ると、宋元版のものは甚だ多い。その中に恐らく秘笈孤本は交じっていると想像できるが、今ちゃんとしたところにあるのだろうか。今私はその残りを收拾した後、来るのが遅かった為に悔やみ、亦書籍の為に悔やまなければならない。

私が初めて来たとき、書店は旧版の書をまだそれほど大事にしなかった。私が大量に購

買するようになったら、其の国の好事者も遂よく高価を出して之を争って購入した。従って旧本は日によって重宝され、嘉靖年間のものでも秘笈視され、私の力は尽きた。然るに私一人の厚い愛好をきっかけに、其の国のいわば既に捨てられた肉を再びまな板に登らせることができた。これまでは、放棄或いは焼却寸前のことであつた。彼等がこれを珍しいものと見るのも、もとより私が厚く希望するところである。(最近、什襲がこれを収蔵し、外国人に売らないようになったと聞いた。)

どの国でも様々な理由で古籍文物が破壊される可能性がある。こうした場合に、あらゆる収蔵及び応急措置は文化の保存に、また全人類にとって有益なことである。楊守敬の行動は、中日両国の古代文明を保存することにおいて、両国の文化交流促進に多大な貢献をしたといえる。今日、中日の学者が中国に伝存する日本古文書の調査研究を展開していることも、楊守敬が文化を保存した貢献を一段と高めることになり、その大きな意義と価値は言うまでもない。

扬守敬及其收藏之日本古文书

葛剑雄

复旦大学中国历史地理研究所

扬守敬(1893-1915年),字惺吾,别号邻苏老人,湖北宜都(今枝城市)人,是中国清末民初著名的历史地理学家、学者和书法家。

清道光十九年春,扬守敬出生于宜都一个商人家庭,其祖、父开设多家店铺。四岁时,其父去世,家业由祖父掌管。生长在这样的环境,扬氏自幼即富于商业头脑,五岁时就在点中数钱,十一岁时就奉祖父之命去姑父孙氏所开店中习商,次年回自家店中照料店务,扬氏成年后就曾自设店铺,为人处世亦极精明。

扬守敬天资聪明,六岁起就由母亲教他读书识字,八岁开始随一覃姓老师读书,九岁学作文,十岁随一谢姓老师读书,十四岁随朱凤池老师读书,同年参加宜都县考,得第十三名。十八岁参加府试,但三场都落第。十九岁师从朱槐卿,学得写文章迅速成篇得能力,同年扬氏在县试和府试中五场都获第一名。但二十岁参加乡试、二十一岁参加恩科乡试都未中,直到同治元年(1862年)二十四岁时才在乡试中获八十名,成为举人。此后扬氏七次赴北京参加会试,但全部名落孙山。最后一次他已四十八岁,从后“绝意科名,专心著述”。

扬氏为秀才时就开始坐馆(当家庭教师),先后在家乡、北京、山西高平等处为富人或官宦子弟授课。扬氏家中开有米店,生活无虞。他从三十五岁起亲自从商,在北京向好友潘存借银子八百两,请同乡商人张云陔从北京贩卖蘑菇倒湖北,但钱被张云陔挪用,经营失败。三十八岁时见经营纸业颇能获利,又向族人借款开设纸行,自任经理。四十岁时将纸行交给其弟扬先三,自携所著《楷法溯源》一书的书版去武昌卖书,获利颇丰。

三十七岁时,经何如璋向天津商人介绍,扬守敬首次鬻字,他的书法作品在不到半个月时间内卖得一百五十元。此后,他五十八岁、六十八岁时都曾到上海卖字,七十一岁时住在上海怡和洋行总办甘翰臣家中,“求书者踵接于门,日不暇接,继之以夜”(《邻苏老人年谱》)。六十八岁和七十一岁时,两次去两江总督端方衙署,为其所藏金石碑版鉴定题跋。

尽管扬守敬在科场连续失利,但七次去北京使他结识了不少名流学者,如潘存、邓承修、何如璋、李慈铭、龚橙(龚自珍子、段玉裁外孙)、袁昶、谭献廷等。何如璋出任清朝驻日本公使,招扬氏为随员,去驻日本公使馆供职。扬氏于四十二岁时到达东京,次年黎庶昌改任驻日公使,扬氏留任,在日本四年,于四十六岁时回国。在此期间,扬氏搜罗日本汉文古籍,为黎庶昌刻成《古逸丛书》二十六种、二百卷,大多是在中国已经失传或散佚的古籍,于光

光绪十年(1884年)刊行。同年,扬氏又撰成《日本访书志》十六卷,至光绪二十七年(1901年)刊行。扬氏在日本的四年不仅是他一生中的重大事件,也是中日文化史上的重要一页。

早在二十岁时(清咸丰八年,1858年),扬氏对地理学就有了兴趣。当时余杭郑兰因避太平天国战争,借居宜都扬氏屋中。扬氏在郑兰晒书时见到一部《六氏舆地图》,即借去影绘了两部,受到郑兰赞赏。第一次入北京时,曾与邓承修同撰《历代舆地沿革险要图》,三十八岁时又在武昌东湖饶敦秩家继续编撰,于光绪五年(1897年)刊行。至光绪末年,扬氏对此图又作修订,六十八岁时重订《历代沿革险要图》及《春秋地图》。扬氏又在学生熊会贞的协助下,继续编成了全套《历代舆地图》。光绪三十二年(1906年)扬氏为《历代舆地沿革险要图》作自序云:

四十年前,余在京师,与归善邓鸿胪承修同撰《历代舆地沿革险要图》。光绪戊寅,复与东湖饶君敦秩增编而刊之。岁久漫漶,鄂中、沪上、西蜀均又翻本,而讹谬滋多。拟重铸之,未暇也。迩来日本河田熊者,就余书删并,竟以南北朝为一图,而图中只题刘宋、北魏两代,岂知南之宋、齐、梁、陈,北之元魏、齐、周,其疆域州郡,分合不常,乃以一图括之。五代十国,亦只一翻,反谓余图为疏略,其诬妄何可言!使初涉亥步者,惊其刻印之观美,其缺略。吾愿读此图者,勿徒观其表焉可也。

《历代舆地图》因卷帙浩繁,分批完成并陆续刊行,具体年代和图幅如下:

光绪三十年(1904年) 前汉地图;三十二年 春秋地图、《历代沿革险要图自序》;三十三年 三国地图;宣统元年(1909年) 战国、秦、续汉、西晋、东晋、刘宋、萧齐、隋地图;二年 明地图、北魏、西魏地图;宣统三年 十六国、梁、陈、北齐、北周、唐、五代、宋、辽、金、元地图。

这套图采用“古墨今朱”法套印,同时显示古今不同的内容,从春秋战国至明代,凡见于先秦典籍及正史《地理志》上的可考地名,基本部都已绘入,直到本世纪七十年代中期《中国历史地图集》出版前,还是中国历史地图中最重要、最富学术价值、最全面的一种,是中国历史地理学和历史地图学的一个里程碑。

1954年,毛泽东询问历史学家吴晗,读中国古史时如何能了解古地名之今地在何处,吴晗推荐了扬守敬此图,又指出此图翻检不便,所用地名均为清末,于今地名不同,建议加以改编。毛泽东采纳吴晗建议,命吴晗组织“重编改绘扬守敬《历代舆地图》委员会”,并召先师谭其骧先生进京主持。此后几经周折,方决定新编《中国历史地图集》,至1989年初出全八册。

扬氏的其他地理著作还有:《隋书地理志考证》九卷、补遗一卷,光绪二十一年刊行;《晦明轩稿》二卷,《续稿》十卷,光绪二十六年刊行;《汉书地理志校补》二卷,光绪二十六年

刊行；《水经注图》四卷，《补》一卷，光绪二十六年刊行；《水经注疏要删》四十卷，光绪三十一年刊行；《水经注疏要删续补》，宣统元年刊行，《水经注疏要删再续补》，木刊；《禹页本义》一卷，光绪三十二年刊行；《三国郡县表补正》八卷，光绪三十三年刊行；《湖北江汉水利议》，光绪三十四年刊行。在他选刻有的《古逸丛书》和所著《日本访书志》中也翻或记录了大量珍贵的古代地理书。扬氏致力于《水经注》研究，晚年在学生熊会贞协助下撰成的《水经注疏》和《水经注图》集中国对《水经注》研究之大成，其成就空前绝后，至今仍无人能够全面超越。

扬氏六十一岁时，湖广总督张之洞电邀任两湖书院教习，主讲地理一门。六十五岁时，朝廷开经济特科，张之洞与两江总督端方合词保举，称其“老成夙望，博览群书，致力舆地学数十年，于历朝沿革险要熟洽精详，著书满家，卓然可传世”。罗振玉曾将杨氏的地理学与王念孙、段玉裁的小学，李善兰的算学，合称为清代三绝学。当代历史地理学也充分肯定杨氏的杰出贡献。

杨守敬与日本汉籍和古文书发生关系，是在他到达日本任公使随员以后，他在《年谱》中称：

先是，余初到日本，游于市上，睹书店中书，多所未见，虽不能购，而心识之。幸所携汉魏六朝碑版，亦多日本人未见；又古钱古印，为日本人所羨；以有易无，遂盈筐莛。

有关杨氏搜集汉文古籍的情况，其他学者已有很细致的研究，笔者着重探索杨氏所收日本古文书及其流传过程。此方面尚未发现直接记载，但从杨氏《年谱》及《日本访本志》中仍有线索可见。

杨氏当时就注意到了日本保存了大量唐人(或相当于中国唐朝时代)手迹的事实及其原因：

日本气候，固无我江南之多霉烂，亦不如我河北之少蠹蚀，何以唐人之迹存于今者不可胜计？盖国有力之家皆有土藏，故虽屡经火灾而不毁。至于钞本，皆用彼国之茧纸，坚韧胜于布帛，故历千年而不碎。

而高山寺和法隆寺是他特别注意搜集的地方：“日本崇尚佛法，凡有兵戈，例不毁坏古刹，故高山寺、法隆寺二藏所储唐经生书佛经，不下万卷。即经史古本，亦多出其中。”尽管他没有具体提到从高山寺和法隆寺搜集到了日本古文书，但从目前所见文书多为来自高山寺一事推断，他携回中国的文书也应该有出自法隆寺者。

由于扬氏在《日本访书志》中没有著录这些零星的、不成书、不成卷的文书，我们还无法肯定它们的流传过程，只能根据扬氏藏书的保存和移动经过作些推测。

扬氏回国后即任湖北黄冈教谕，五十岁时（光绪十四年，1888年）在黄州筑邻苏园（因城北有苏东坡赤壁而命名）以藏书，这些古文书也应该收藏于此园。六十四岁（光绪二十六年，1902年）任两湖书院教职时，于武昌菊湾买屋，次年建书楼，邻苏园的书籍文物均应迁至此楼。

宣统三年（辛亥，1911年）武昌起义爆发，扬氏避居上海，书籍留于武昌，由仆人守护。以后得知，因日本人寺西秀武向民军都督黎元洪请求，黎元洪特意在扬宅门上张贴告示：

照得文明各国，凡于本国之典章图籍，罔不极意保存，以为国家光荣。兹查有杨绅守敬，藏古书数十万卷，凡我同胞，均应竭力保护。如敢有意图损毁，及盗窃者，一经查觉，立即拿问治罪。扬绅系笃学老成之士，同胞咸当爱敬，共尽保护之责，以存古籍而重乡贤。

中华民国元年（1912年），扬氏命家人将武昌所藏图籍全部运至上海寓所。民国三年，扬氏被总统袁世凯聘为参政，移居北京，将上海图书陆续运去。至民国四年（1915年）1月9日，扬氏在北京逝世。

从目前扬氏所藏日本古文书主要集中在湖北省博物馆一事判断，在扬氏历次迁移中，这批文书的主要部分并未随迁至上海和北京，而是与《历代舆地图》《水经注图》两书的木板一起，留在武昌旧宅，至1963年10月23日，出扬氏的孙子先梅及其子树干献给湖北省文史研究馆。目前保存在湖北博物馆的扬先梅、扬树干呈文手迹云：

今将先祖扬守敬先生遗著是业经刊成的《历代舆地图》及《水经注图》两种版片全部，捐献呈于湖北省文史研究馆，恭请保管，理合开具清册于下：……

关于这批木板的保存经过，呈文云：

上列图板，原存于武昌斗级营街寓所。一九三七年抗日战争起，为了保存起见，冒日寇飞机轰炸之危险，用小船分三批运往汉口，租屋保存。因租金奇昂，一迁于汉湖里，再迁于□□里，最后又迁于汉口郊外农家。时日寇侵犯汉口，见欲毁之，经农民泣求始免。一九四五年抗战胜利后，始迁于现居之满春巷。

呈文没有提到这些古文书，或许因当时不受重视所致，但从木板以后一直山湖北省博物

馆保管分析，文书也应在此时由湖北省文史研究馆接收，再移交博物馆的。现在由山杀某私人收藏的一部分书，也是由武汉扬氏旧宅中流出的。

从上海博物馆、天津市艺术博物馆、北京图书馆、北京大学图书馆都藏有零星文书看，扬氏在世时将图书迁往上海、北京的过程中，也已带出部分日本古文书，以后才陆续流入他人之手。如天津市艺术博物馆的文书主要来自周叔弢家。这样看来，这些书文还有流散在其他地方的可能。但由于中国学者或收藏家往往将这些书文误认为敦煌文书，或古人写经，所以如不进行全面普遍的调查，将难以发现，除有明确著录（如记有高山寺或日本其他寺院、年号者）者外，一般也不易鉴定。

最近，承友人靳飞先生告知：庆应义塾大学所藏斯道文库中，有森立之的七册手稿《清客笔谈》。森立之是扬氏当年访书的主要中介，扬氏称：“日本收藏家余之所交者，森立之、向山黄村、岛田重礼三人，嗜好略与余等。其有绝特之本，此录亦多采之。”《笔谈》中除森立之抄录的谈话记录外，还有扬氏用于笔谈的原稿。因正值寒假，未能看到书稿，不知其中是否有关于这些文书的内容。

扬守敬在《日本访书志缘起》中云：

日本维新之际，颇欲废汉学，故家旧藏，几于论斤估值。尔时贩鬻于我土者，不下数万卷。犹忆前数家有蔡姓者，载书一船，道出宜昌，友人饶季音得南宋板《吕氏读书记》一部，据云宋元槧甚多，意必有秘笈孤本错杂于中，未知流落得所否？今余收拾于残剩之后，不能不为来迟恨，亦不能不为书恨也。

余之初来也，书肆于旧板尚不甚珍重。及余购求不已，其国之好事者遂亦往往出重值而争之。于是旧书日稀，书估得一嘉靖本，亦视为秘笈，而余力竭矣。然以余一人好尚之笃，使彼国已弃之内复登于俎，自今以往，谅不至拉杂而摧烧之矣。则彼之视为奇货，固余所厚望也。（近日则闻什袭藏之，不以售外人矣。）

每个国家都可能因种种原因使古籍文物遭受破坏，在这种情况下，任何收藏、抢救都有益于文化的保存，都有益于全人类。扬守敬当年的行动为保存中日两国的古代文明，为促成两国的文化交流作出重大贡献。而今中日学者共同开展对在华日本古文书的调查和研究，使扬氏保存文化的贡献得以发扬光大，其意义和价值自不待赘言。